

中国における都市近郊農村の拠点計画

陳 瀟男¹⁾, 沈 悦¹⁾, 光成 麻美¹⁾

Rural Planning for the Village in Suburban Area of China

Xiaonan CHEN, Yue SHEN, Asami MITSUNARI

【Abstract】

In Japan, the form of multifaceted use of agricultural land introduced into rural plan to revitalize the rural area is accepted, but there is no such an equivalent in China, and it has become a problem of the adjustment of "diversion" and "securing" agricultural land. The purpose of this research is to propose a spatial design plan aimed at solving the problem of adjustment of the farmland by picking up Huangqi village of Fushun City in China as a model research field. This research will go through the following flow: 1. Analyze the data from literature survey, hearing survey and field survey; 2. Examine the way of important bases; 3. Propose the spatial design plan of concrete images of target space. The features are as follows.

- 1) Using corn farmland, we created a space for the base that made other use possible while holding function of agriculture.
- 2) By designing the farmland stage in the corn farmland, where the farmers could take a break, and the visitors can experience agriculture, it also contributes to the improvement of communication between people from urban area and rural area.
- 3) It draws out the charm of agricultural land by utilizing existing resources and forming agricultural landscape experience base.

Key words : rural landscape, village, out-door space, farmland

1. 背景と目的

中国の農村地区は、日本の農村地区と同様に就農人口の減少が進んでいる。また、近年は都市近郊における農村の人口流失現象が顕著であり、特に耕作放棄地においては年々流失が増加している。この背景下、使用していない一部の農地の多目的な活用について議論がされており、農地転用の調整が課題となっている。(https://www.tuliu.com/read-92375.html.2018年9月参照)。

一方日本では、「農地を農業の機能としての“継続”と、農業外の“転用”といった二つの中間的な形態として、農地を同時に農業以外の目的にも利用していく、農地の多面的利用の形態を導入し、土地利用を調整している」(合田・東1992)といった農地の多面的利用を通じて、地域を活性化する農村計画が認められているが、中国では、その視点を取り入れた農村計画が少ない。

本報告では、中国にある具体的な対象地をとりあげ、

農地の多面的利用を主眼にした農地空間をレクリエーションなど多機能のある拠点エリアとして計画することを目的とした。またこのように計画を立てることで中国が抱える農地の課題に対する解決策の糸口を探る。

2. 進め方

対象地は、都市近郊農村地域が抱える農地の調整に関する課題を有し、且つ農村振興計画で計画地域として位置づけられている中国遼寧省撫順市の黄旗村を選定した。計画のプロセスとしては図-1示す。まず既存文献の調査を行い、農地の空間

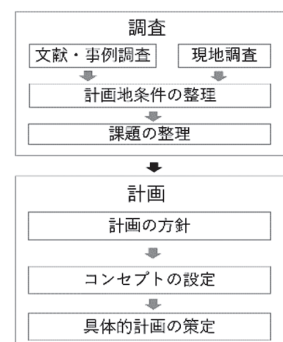


図-1 ワークフロー

1) 兵庫県立淡路景観園芸学校/兵庫県立大学大学院緑環境景観マネジメント研究科, Hyogo Prefectural Awaji Landscape Planning & Horticulture Academy / Graduate School of Landscape Design and Management, University of Hyogo

の特徴を把握した。

次に、対象地の現地調査を行い、条件の整理・分析をした上で課題を整理した。調査では、対象地の住民と都市部の市民にヒアリング調査を行い、要望、村の資源、課題の把握を行った。次に課題の分析を踏まえ、対象地の重要拠点となる空間の計画を策定した。

3. 基本調査

3.1 文献調査

中国における農村の土地利用の現状について、文献調査を行った。中国では画一的な農村計画があったため、都市型に近い街並みの形成が進み、特徴のある農村風景や地域のアイデンティティが徐々に消失し、農村が一方向的に都市に消費されているような現象が起きている (<https://wenku.baidu.com/view/6db3e8a877c66137ee06eff9aef8941ea76e4bb6.html>, 2019年2月参照)。また日本のような農地の多面的利用の形態を導入した例や、それによる地域の活性化を確認できる事例が少ないことも分かった。特に、農地といった資源を教育福祉、レクリエーションの場として利用する事例はほとんど見当たらず、農地の多面的利用の面においては中国の現状から展開の余地力があると考えられる (羅文斌ほか, 2010)。

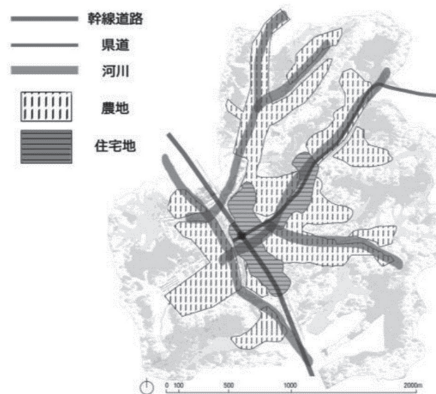


図-2 対象地(黄旗村)の現況図

表-1 対象地の条件整理の結果

社会条件		自然条件	
用地	用地の総面積: 910ha 農地: 248ha 林地: 467ha 建設用地(住宅地・工業用地): 74ha	地形	地形: 山地; 標高: 157 m 東方面の山が多くて高い 西方面の山が少なく低い 真ん中の地形が平坦
施設	村の役場・交通・郵便局・老人ホーム・美容室・農産品加工企業・ゴム工業・採石場・商店・レストラン等	気候	大陸モンスーン気候 年間降水量: 約800mm 夏: 暖かい、湿度が高い 冬: 寒い、乾燥、雪が降る
交通	幹線道路と県道が村の真ん中で位置し、村から撫順市の中心市街地への距離が5 kmで、車で15分まで中心市街地まで行ける	常緑樹木:	アブラマツ・イブキ・ チョウセンゴヨウ
産業	農業: トウモロコシ農地・リンゴ農園など 林業: 松林など 工業: ゴム製造業・農産品加工業・採石場	落葉樹木:	シラカンバ・ベキンヤナギ・ モクゲンジ・キササゲ・ シベリアニレ・イチョウ
文化	錫伯族文化(少数民族文化)	低木:	イロハモミジ・スイカラ・ ヤマブドウ
人口	村の総人口: 2010人(18歳まで242人) 女性: 1022人; 男性: 890人	草本:	ハルシヤギク・キキョウ ナデシコ・セキチク・ ワスレグサ・ギボウシ
		水系	黄旗河、鹿角河、東海河3つ大きな河川がある。そのうち1つは住宅地に位置する

表-2 対象地の資源と課題の結果

資源	課題
① 農地と山の豊か	① 人口減少による村の活力が無い
② 採石場の石資源が豊か	② 散策道や休憩する開放的な空間がない
③ 地形の高さの多様性	③ 毎週金曜日に定期行うマーケットが幹線道路の両側に位置し、通過する車に邪魔になると人にとっても危険性が高い
④ 水辺空間には景観性の利用性が高い	④ 都市化による農業の担い手が不足、農地の放棄の課題
⑤ 都市の中心市街地までの距離が近い	⑤ トウモロコシの栽培の供給過剰
⑥ 地元の特性あるマーケット	⑥ 都市との交流が少ない
⑦ 植生が豊富	
⑧ 冬が雪降る、風景が良い	
⑨ 年間日照時間が長い	

3.2 現況分析

3.2.1 対象地の概要

対象地は中国遼寧省の撫順市近郊にある面積約910haの黄旗村である(図-2)。撫順市中心市街地からの距離は6.5km。周辺は山に囲まれ、トウモロコシ等の広面積の農地や豊かな水系など、自然資源に恵まれている。その自然条件と社会情景の整理は表-1に示す。

3.2.2 対象地周辺の調査

対象地の周辺には撫順市の中心市街地があり、市内人口約200万人。撫順市は炭田を中心に発展した鉱工業都市であるが、現在は石炭採掘が衰退し、重工業依存からの脱却を図っている。エリア内は自然教育や、自然風景・農風景を活かした体験等の施設がなく、市民が屋外スペースの利用率が低くなっている一方、自然や「農」とふれあえるレクリエーション施設があった場合、多くの利用者の来訪につながると考えられる。

3.2.3 対象地の資源と課題の整理

対象地の資源と課題を整理した表-2のように、土地利用の面ではトウモロコシ農地が多く、その大量生産で供給過多になっているほか、農家と外部の交流の重要な場であるフリーマーケットの位置関係も幹線道路の側にあり車通行に絡む安全面の問題も大きい。

3.2.4 住民ニーズの把握

現地及び周辺都市部でのヒアリング調査結果を整理した(表-3)。都市部の市民からは自分たちで「農」にかかわりたいなど、農業への関心が高く、農地のレクリエーション機能を期待していることが分かった。また対象地の住民の場合、屋外の散策・休憩や人との会話・交流できる場も望まれている。このようなニーズから、十分に利用されていない農地や既に荒れている農地を活用し、地元と都市住民の両方が自由に使える屋外空間の創出に意味があると考えられる。

表-3 ヒアリング調査結果

対象地の住民	都市部の市民
村の中で散策できる空間が欲しい	自然と触れ合うレクリエーション空間
近所の人と会話できる屋外空間が欲しい	農業体験できる空間が欲しい
若者を村に引き付ける魅力の創出	新鮮の農産品が買える市場(マーケット)
園芸など植物に関する観賞や体験できる空間	リラックスできる空間が欲しい
子供が遊ぶ空間(親子共同休憩できる空間)	子供に自然教育体験できる場所
冬が寒くて、日向ぼっこ場所が欲しい	農村風景を楽しめる場所が欲しい

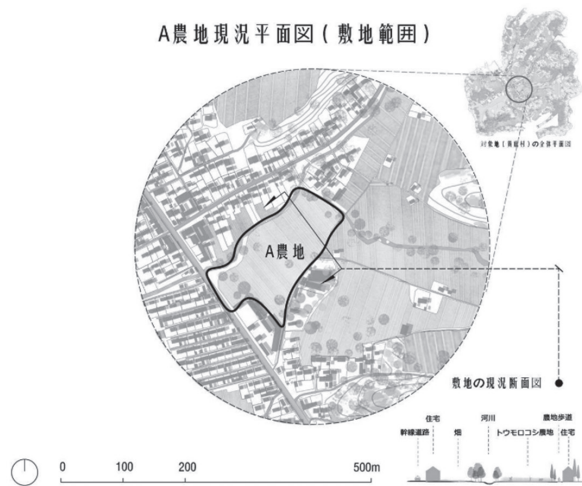


図-3 敷地分析（計画地の選定）



図-4 ゾーニング図

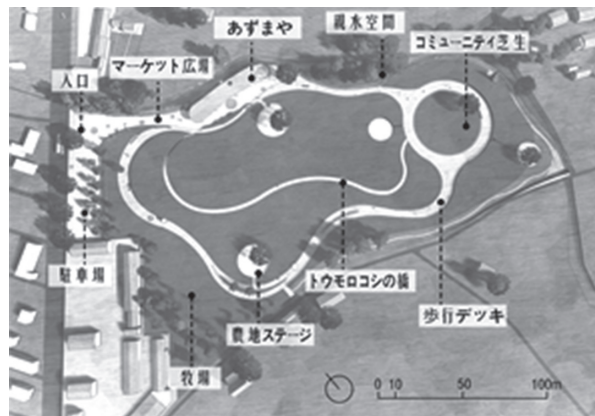


図-5 全体配置図

4. 計画の提案

4.1 基本的な考え方

対象地の資源・課題やアンケートによる要望などから、農地空間を生かし、さらに農風景もいかした屋外の「場」が地元住民と都会からの来訪者の両方にとって必要と考えられる。そこで、本計画は幹線道路からちょっと離れた安全面のよいエリアに、生産過剰にも

なっているトウモロコシ農地の一部と荒れた農地とを合わせた4.4haの土地を取りあげ、農産物の生産とレクリエーション機能を持つ、農地の多面的利用も可能にする拠点空間の形成を計画の基本方針とした。具体的には以下の通りである。

- i 担い手がいない放棄農地や、廃耕の恐れがある農地を対象とした上、その農地空間を生かし、村のオープンスペースを創出することで、人々の日常行為としてのコミュニケーションを促す。また農産物の直売所や農業体験ができる空間の創出により、都市と農村の交流を促す。
- ii 農地風景の景観形成により、新たな魅力を醸成し、若者の農業や農村に対する関心を高め、農家の労働環境や農村生活の質の向上を図る。
- iii 村のマーケットを行うことができる空間を形成し、日常の利用と農村の住民や来訪者を巻き込んだイベントが行われる場所として気楽に利用ができるような拠点を形成させる。

4.2 コンセプト

農地は本来、自然と都市の間の存在として、自然と人、人と人を有効に繋げる空間になるはずの位置づけだったが、現代ではその繋がりが希薄となっている。本計画は上述の従来の関係性を取り戻すように「農地での人との出会い」や、「コミュニケーションが日常の生活に溶け込んでいる農村風景」を創出することを目指す。

4.3 立地（計画エリアの選定）

計画地は村のトップ組織と相談の上、村の住宅地エリア付近のA農地に設定し、敷地の測量も行った（図-3）。このエリアの選定キーワードは以下ようになる。

- i A農地ではトウモロコシが生産されているが、生産者の高齢に伴い、担い手がいない等の理由で、来年少放地になる可能性が高い。
- ii A農地は村の中心に位置し、東側には幹線道路があり、北と西側には水辺があるため、交通の便利性と景観性が高い等のメリットがある。
- iii 地形が平坦で安価で整備することは可能である。

4.4 ゾーニング

基本方針を踏まえ、計画地を交流農地ゾーン、マーケット広場ゾーン、散策ゾーンに分けて、コミュニティ拠点を形成する（図-4）。

4.5 計画

計画は大きく農地ゾーン、マーケティング広場ゾーン、散策ゾーンに分ける。計画地の中心の農地ゾーンは、基本的にトウモロコシエリアとし、その農地の景観に溶け込むような歩行デッキを配置し、回遊できる形態とした。来訪者が農地の風景と農作業の様子を見

たり、農家の人と会話ができ、農業体験が可能な場所とした。入口付近にはマーケット広場を設け、村と外部からの人々の交流の場として位置付ける。散策ゾーンは特に借景への眺めの良いエリアに、既存の用水路景観と南方向の里山風景を借景として取り入れるようにした。全体として農地風景と水景観の演出を促し、自然・農業・人を融合した農村風景の形成を図ることとした(図-5全体配置図)。

4.6.1 農地ゾーン

1) トウモロコシ農地

トウモロコシ農地を景観要素として残し、外周を回遊できる柔軟な動線を導入するなど、人の交流を促し、農業体験できる空間として配置する。

2) 歩行デッキ

水辺や農地など各拠点につながる主要回遊動線をデッキでつなげ、マーケット広場からコミュニティ芝生までの誘導性を高める。またデッキ上の様々な視点から農地や借景への眺めを確保し、農作業などの活動に参加しやすい動線型施設とする。

3) 農地ステージ

トウモロコシ農地の中にステージを配置し、農地の風景をのぞめる拠点や農民の休憩場に多目的な機能を持たせる。季節によってここはトウモロコシの干場になったり、地元住民と来訪者の交流空間になったりして、多面の役割が寄与できる空間とする(図-6)。

4) トウモロコシ農地の橋

トウモロコシ農地の中には、高低差の変化がある連続した橋のような道を設置した。この道を利用する人々は橋の高低差によりトウモロコシ畑の中から上への空間を感じることができる。この動線は曲線の形とし、360度全方向の風景を楽しめるようにし、道を景観の一部として演出する(図-7)。

5) コミュニティ芝生

コミュニティ芝生は、芝生とシンボルツリーと円形の歩行デッキに囲まれた開放的な空間とする。また、デッキの段差を活かして、野外ステージのベンチとして利用することで、家族やグループの利用に適している。真ん中に設置した芝生は遊ぶ子供やペット連れの利用者などに使いやすい空間とした(図-8)。冬の季節では芝生広場で雪を使って遊ぶことができるほか(図-9)、遠方の雪山が背景として見える空間としてアイデンティティのある景観形成につながる(図-9)。

6) 牧場

牧場は、農風景のもう一つの要素として再現した。農作業以外の時間は牛が牧場で活動をする。農作業のある時期は、農家が牧場の牛(馬等)を使って一部のトウモロコシ農地で作業を行うこともでき、農業機械作業と違った風景も楽しめるようにする(図-10)。

4.6.2 マーケット広場ゾーン

マーケット広場ゾーンは、入口(図-11)の駐車場(図-12)から既存の水辺空間、トウモロコシ農地の間に屋根がかかっているシェルターまでの空間である(図-13)。このマーケット広場は村民の休憩所や農産物の直売所とコミュニティセンターになり、農村の住民や来訪者を巻き込んだイベント広場としても使える。

4.6.3 散策ゾーン

既存の用水路を活かし、散策ゾーンにせせらぎを感じることができる空間を創った。蛇行した散策道を農地の間に配置し、農地側の小道には小さい園芸花壇を設置し、日常的に歩きたくなる風景を創出した(図-14)。

4.6.4 設計ディテール

ディテールの工夫は次の3点になる。1点目は、農地に配置する歩行デッキは、ベンチとしても利用できるようにした。このデッキの形に応じて、ベンチの形も変化し、空間のリズムを創出した。2点目は、トウモロコシの倉庫を黄旗村の村民生活で実際に使用されていたものとして、重要な景観要素としてトウモロコシの倉庫を取り入れた。3点目は、親水空間で使用する飛び石に、村の採石場の石資源を活用した(図-15)。



図-6 農地ステージ(トウモロコシの収穫季節)



図-7 (上・下) トウモロコシ農地の橋

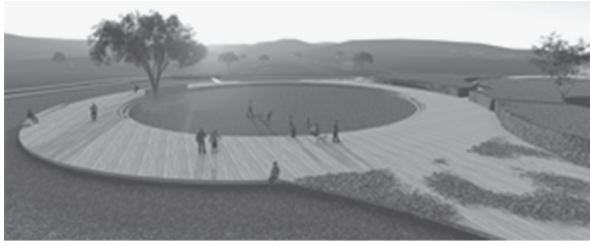


図-8 コミュニティ芝生（夏）



図-9 コミュニティ芝生の冬季雪遊び



図-10 牧場



図-11 入口



図-12 駐車場



図-13 マーケット広場ゾーンのシェルター



図-14 散策ゾーンのパス



図-15 デイテール（上左：トウモロコシ倉庫）
（上右：親水空間 下：歩行デッキにあるベンチ）

5. まとめ

本報告は、中国の農村計画において農地の多目的利用の視点から、農地空間を生かした拠点エリアを計画し、農地問題解決の糸口を探った。計画の特色としては1) 既存のトウモロコシ農地を最大限にいかし、農の機能を保ちながら農業外にも利用可能な拠点空間を創出した。2) 対象地の区間を農家の人々が休憩できる空間と来訪者が農業体験できる空間を形成し、フリーマーケットなどの整備によりコミュニケーションの向上に寄与した。3) 対象地周辺固有の借景資源を生かした整備により農村観光の魅力アップに寄与した。このような計画をもって、使用していない農地の一部を多目的に利用できる拠点を創出し、本報告のヒアリングに示された農村住民が望んだ余暇に使いやすい村中の屋外空間の在り方と、都市部住民が望んだ農体験や自然とのふれあい空間の形成につながるものとして整備していくことが農地の多面的活用において意義があり、有効的な提案だと考えられる。

一方本報告は、現段階において対象地区の農村計画に一部の内容として取り組まれているが、時間の関係で実質的な多面的利用の空間整備検証までは至らず、今後の課題としたい。

参考文献

合田素行・東廉（1992）農地の多面的利用—土地利用調整方策として—，農総研季報15, 27-39。
羅文斌・呉次芳・譚榮（2010）城郊農地休閒地利用初探，中国西北農業科技大学学報，社会科学版2010（6），(<https://wenku.baidu.com/view/9c436659690203d8ce2f0066f5335a8103d26624.html>)

